広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語名詞複合語とイタリア語表現
Author(s)	上野，貴史
Citation	ニダバ，26 : 77 - 85
Issue Date	1997-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044352
Right	
Relation	

論　文

英語名詞複合語とイタリア語表現

上　野　貴　史

1. 目的

イタリア語やスペイン語などのロマンス語学習者を悩ませるものの一つに、複合語の非生産性ということが挙げられる。これは、英語や日本語などと比較して、ロマンス語が複合語を自由に生成しないということに起因していると考えられる。このようなロマンス語複合語の先行研究の中で、イタリア語名詞複合語[1]については、Sintagmaなどと呼ばれる名詞を二つ並置する構造に関して、多くの指摘が見られる。例えば、Lepschy & Lepschy (1988:189-190) では、この名詞を並置する構造をJuxtapositionと呼び、「イタリア語には、Juxtapositionの構造が統語パターンに同化していないこと」や「電信などにおける使用に限定されていること」などが指摘されている[2]。また同様に、Serianni (1989:79) では、この構造の発達しているドイツ語に対して、イタリア語におけるSintagmaの生成は「例外的」であり「科学技術分野の枠を出ない」ということを言及している[3]。これらの記述からイタリア語における名詞複合語の非生産性を窺うことができる一方で、Sugeta (1989:196) では、ゲルマン語などの影響から、急速にイタリア語でも名詞複合語の構造が生成されつつあるということが指摘されている[4]。このことから、イタリア語の名詞複合語は、急速に生成されつつある一方で、まだ十分に統語パターンに統合されていないと約言できよう。これとは対照的に、英語において、既存の語彙を組み合わせることにより意味体系を複雑化する複合語形成は、新語生成の重要な手段の一つとなっている。このような英語複合語には、すでに語彙化されているものから、しばしばハイフンなどを伴うような「その場限り」の複合語まで様々なものが見られる。そこで、英語複合語、特に名詞複合語が複合語生成において未発達とされるイタリア語でどの様に表現されるかを分析することによって、両言語の語形成過程における言語構造の相違を明らかにしていくことにしたい。このような考察から、イタリア語における語彙構造や新語生成のメカニズムを解明することが、本稿の目的となる。

2. 資料

英語名詞複合語とイタリア語表現を考察するに当たり、本稿では、英語・イタリア語辞

典の一つである*Cassell's Italian Dictionary*[5] (*Cassell's*) を資料として活用することにする。*Cassell's*を言語材料として選択した理由としては、他の辞書と比較して複合語が見出しとして豊富に掲載されていること、英語複合語とイタリア語の表現の対応が簡潔に示されていることなどが挙げられる。また、必要に応じて、*I Dizionari Sansoni*[6] も参考にする。このような辞書に見出しとして登録されている複合語は、「一回限りの使用」や「その場限りの使用」という複合語ではなく、比較的語彙化されているという特徴があると考えられる。従って、本稿では、比較的語彙化された英語名詞複合語とそのイタリア語表現を分析することになる。

次に、複合語は「二つまたはそれ以上の語が結合して、新たに生じた語」[7] と一般的に定義付けされるが、本稿では特に、二つの要素からなる複合語を資料として収集する。この複合語における第一要素を〈E_1〉、第二要素を〈E_2〉とし、二要素からなる英語複合語を (1) のように記述することにする。

(1)　E_1+E_2

このような名詞複合語の構成要素については、単純語で構成される一次複合語の場合、〈E_1〉と〈E_2〉が共に名詞 (N) であるもの (2) と、〈E_1〉が所有格の形態 (N's) をとるもの (3) を収集することにする。

(2)　E_1+E_2: 〈N+N〉　money box/sheepcote/stagecoach

(3)　E_1+E_2: 〈N's+N〉　dog's-ear/guard's van/printer's error

また、複合語構成要素が派生語・複合語である二次複合語では、〈E_1〉が名詞、〈E_2〉が動詞の転換形 (Vcon) (4)・派生形 (Vder) (5) のものと、これらと出現位置が反対である (6)、(7) のものを収集することにする[8]。

(4)　E_1+E_2: 〈N+Vcon〉　bellpush/birth control/fire escape

(5)　E_1+E_2: 〈N+Vder〉　blood relation/fire insurance/heart failure

(6)　E_1+E_2: 〈Vcon+N〉　call box/cutwater/deposit account

(7)　E_1+E_2: 〈Vder+N〉　accommodation bill/employment agency/engagement ring

これら以外にも名詞複合語の構成要素としては、形容詞 (A) や不変化詞 (Par) など[9] が存在するが、本稿では、基本的に〈N+N〉で構成されている名詞複合語を対象としていることから、形容詞や不変化詞などで構成される名詞複合語は除外することにする[10]。以上のような基準によって英語名詞複合語を抽出する際、それに対応するイタリア語表現が複数記載されている場合は、すべてを収集する。この結果、*Cassell's*の見出し語から抽出された英語名詞複合語は、3,773語、これに対応するイタリア語表現は、4,382種類となった。

3. 英語名詞複合語とイタリア語表現

抽出した英語名詞複合語に対応するイタリア語表現をその語彙範疇に基づいて分類し、出現率を示すと (8)[11] のようになる。

(8)　$E_1+E_2 \rightarrow n$　(42.9%)

n+p+n　(37.3%)

n+a/a+n　(11.8%)

複合語　(5.0%)

その他[12]　(3.0%)

(8)に示したように、英語名詞複合語がイタリア語で複合語として表現されているものは、僅か5%に過ぎない。一方、〈n〉や〈n+p+n〉で表現されているものは、全体の80%を越える数値となっている。このことは、英語名詞複合語がイタリア語では複合語以外で表現されるということを顕著に示している。次に、(8)の分類に従って、イタリア語表現を具体的に考察していくことにする。

3.1 n

名詞表現は、英語名詞複合語に対応するイタリア語表現として、最も頻度の高いものとなっている。この名詞表現を具体的に分析すると、名詞単独のものと、ある語彙範疇(x)に接尾辞(suf)が付加されているものの二種類に分類できる(9)。

(9)　$E_1+E_2 \rightarrow n$

x+suf

名詞表現の中で約50%を占める〈x+suf〉の中に現れる接尾辞を、Dardano & Trifone(1985)に従って分類し、出現率を示すと(10)[13]のようになる[14]。

(10)　N→N　(41.2%) : -aglia/-aio/-ata/-ario/-aro/-eria/-eto/-iera/-iere/-ile/-ista/-ite/-ume

Al.Dim. (31.6%) : -acchiotto/-cino/-ello/-etto/-icello/-ino/-(u)olo/-otto/

V→N　(14.9%) : -aggio/-ante/-ata/-ente/-enza/-ino/-mento/-one/-toio/-tore/-ura/-zione/Φ[15]

Al.Acc. (7.5%) : -accio/-astro/-iccio/-occio/-one

Se.[16]　(3.5%) : -cultore/-cultura/-emia/-ficio/-fugo/-grafo/-mane/-vendolo

A→N　(0.9%) : -anza/-ismo/-ità

N→A　(0.4%) : -ico

これらの中で、-ista、-aio、-inoの例を挙げると、それぞれ(11)、(12)、(13)のようになる。

(11)　-ista: chess-player→scacchista/congressman→congressista

(12)　-aio : bookseller→libraio/clockmaker→orologiaio

(13)　-ino : ballet skirt→gonnellino/dickeybird→uccellino

(11)では、chess playerに対して、chessを意味するscaccoにN→Nの接尾辞-istaが付加さ

れ、playerの概念が示されている。また、(12)では、booksellerに対して、bookを意味するlibroにN→Nの接尾辞-aioが付加され、sellerの意味を表現している。また、(13)では、ballet skirtに対して、skirtを意味するgonnellaに「縮小」概念を含意する接尾辞-inoを付加することによってballet skirt全体を表現している。このようにイタリア語では、意味の多様化を図るために、複合語形成ではなく、接尾辞を付加する派生語によって語形成が行われているものがかなり多く見られる。

次に、英語名詞複合語における構成要素のどの部分がイタリア語の名詞として現れているかということについて見てみると、英語名詞複合語の構成要素である〈E_1〉、〈E_2〉のどちらにも対応せず、全く別の名詞で表現されている場合(E_1+E_2→n)と英語名詞複合語の構成要素のどちらか一方にイタリア語が対応している場合(E_1+E_2→n(E_1/E_2))の二つに分類することができる。

(14)　E_1+E_2→n　　: candle-end→moccolo/childbirth→parto/fatherland→patria

(15)　E_1+E_2→n(E_1/E_2) : kedge anchor→ancorotto/ballet dancer→ballerino/flower garden→giardino

例えば、(14)のcandle-endのように、英語では、candleとendという二つの名詞要素から複合語が生成されるのに対して、イタリア語では、英語複合語の構成要素に対応しないmoccoloと表現されている。これらの英語名詞複合語には、(16)のようにイタリア語と同様に単独の名詞でも言い表すことが可能なものを複合語にしているものが見られる。

(16)　boat race(regatta)→regata/breastbone(sternum)→sterno/communion table(altar)→altare

イタリア語表現において名詞単独のregataで表現されている英語のboat raceは、英語にも類義語としてregattaという語彙を持つ。このことは、英語において、名詞要素の複合語が生産的であり、既知の名詞を組み合わせることによって新語を容易に造り出していることを示していると考えられる。次に、英語名詞複合語の構成要素のどちらか一方にイタリア語が対応しているものとしては、(15)のようなものがある。kedge anchorでは、二番目の要素である〈E_2〉のancorと対応するイタリア語ancoraに、縮小接尾辞-ottoが付加され、kedge anchor全体を表現している。また、ballet dancerでは、最初の要素である〈E_1〉のballetと対応するイタリア語ballareに、V→Nの接尾辞-inoが付加され、dancerの概念が示されている。これらは、英語複合語における一方の構成要素が、イタリア語で名詞や動詞などの語彙範疇に、そしてもう一方の構成要素が接尾辞となって派生語形成が行われているものである。

以上、名詞表現における考察から、イタリア語では、既存の語彙に接尾辞などを付加する派生語形成が新語生成において重要な役割を果たしており、このことによって意味を多様化しているということが推察できる。

3.2 n+p+n

二つの名詞の間に機能語を介在させる〈n+p+n〉では、英語名詞複合語の最初の要素にあたる〈E_1〉がイタリア語において前置詞の後ろに位置し、英語複合語の二番目の要素である〈E_2〉が前置詞の前に現れる(17)。

(17) $E_1+E_2 \rightarrow n_2+p+n_1$

〈p〉の位置に現れる前置詞の出現率とその例を示すと(18)のようになる[17]。

(18) a. di (67.7%): tasso di sconto (bank rate)/gabbia di uccello (birdcage)/luce di candela (candlelight)

b. da (13.2%): sala da pranzo (dining room)/mazza da golf (golf club)/cane da guardia (house dog)

c. a (10.2%): poltrona a ruote (bath chair)/becco a gas (gas burner)/cucina a gas (gas stove)

d. per (4.9%): tettoia per imbarcanzioni (boathouse)/paletta per le spazzature (dustpan)/spillo per la cravatta (breastpin)

e. in (1.5%): incisione in legno (wood engraving)/capitale in obbligazioni (debenture stock)

f. con (1.0%): biscotto con zenzero (brandy snap)/dolce con frutta (fruitcake)

g. contro (0.8%): assicurazione contro l'incendio (fire insurance)/maschera contro i gas (gas mask)

h. su (0.5%): imposta sul patrimonio (estate duty)

i. come (0.2%): naso come un peperone (grog blossom)

このように、複合語を生成せず、前置詞を介する表現を多用する要因の一つには[18]、イタリア語と英語における主要部の位置の相違ということが考えられる。複合語というものが「名詞＋前置詞＋名詞」の構造から前置詞の脱落を経て生成されると仮定すると、英語では主要部が右側の位置に生じるためN_1とN_2の移動が起こるが、イタリア語においては、主要部が左側の要素に現れるため単に前置詞を脱落させた形となる(19)。

(19) En. $N_1+P+N_2 \rightarrow N_2+N_1$

It. $n_1+P+n_2 \rightarrow n_1+n_2$

一般的に、主要部には性や数の屈折変化が起こるが、この結果、英語では語末の〈N_1〉に、イタリア語では第一要素末の〈n_1〉に屈折変化が起こるようになる。基本的に語末に屈折要素が生じるイタリア語において、この複合語の第一要素末に屈折要素が生じることは、非複合語語彙と比較してかなり特殊なものになると考えられる。このように語末ではない位置に屈折要素が生じることが、イタリア語複合語における非生産性の要因の一つであると思われる[19]。このようなことから、イタリア語では前置詞を脱落させる複合語の形成を行

わず、前置詞を介した形で語彙化しているものがしばしば見られる(20)[20]。

(20) agenzia di viaggio(travel agency)/discesa in picchiata(nose dive)/caccia alla volpe(fox hunt)

(20)のtravel agencyに対するagenzia di viaggioは、前置詞を介した表現で語彙化しており、辞書にも小見出しとして登録されている。このように、イタリア語では、〈n+n〉の複合語形成を行わず、前置詞を介した形で語彙化するという傾向がある。

3.3 a+n/n+a

英語名詞複合語がイタリア語で、名詞と形容詞の結合で表現されるものは、基本的に英語の最初の要素である〈E_1〉がイタリア語で形容詞となり、〈E_2〉が名詞で表される[21](21)。

(21) $E_1+E_2 \rightarrow n_2+a_1/a_1+n_2$

(22) atom bomb→bomba atomica/carbon paper→carta copiativa/dog days→giorni canicolari

例えば、(22)のatom bombにおいて、〈E_1〉であるatomがイタリア語ではatomicaという形容詞として出現し名詞bombaを後置修飾している。このようなものの中には、〈n+p+n〉と同様、ある程度語彙化されているものが見られる。これは、一種の〈n+a/a+n〉複合語とも言えるもので、英語のaurora borealisに対するイタリア語表現aurora boreale、英語のworker beeに対するイタリア語ape operaiaなどが挙げられる。

3.4 複合語

最後に、全体の5%に過ぎないが、英語名詞複合語がイタリア語でも複合語として表現されているもについて見てみる。これらは、その構成要素の語彙範疇から、〈n+n〉で構成されるものとその他の語彙範疇から構成されるものに分けることができる[22]。まず、〈n+n〉で構成されている複合語には、(23)のようなものがある。

(23) a. center half→centromediano/prince consort→principe consorte

b. call girl→ragazza-squillo/ferryboat→nave traghetto

c. angelfish→pesce angelo/goods train→treno merci/flyweight→peso mosca

〈n+n〉複合語の中で、英語などの語順をそのまま翻訳借用しているものに、(23a)のcenter halfに対するcentromedianoやprince consortに対するprincipe consorteなどがある。これらは、英語と同様、主要部が右側の要素に生じる。一方、英語などから翻訳借用されているものでもイタリア語の統語パターンに変換されて使用されているものに、(23b)のcall girlに対するragazza-squillo、ferryboatに対するnave traghettoなどがある。これらは、イタリア語複合語と同様、主要部が左側の要素に生じる。この他のものとしては、(23c)のようなangelfishに対するpesce angeloやgoods trainに対するtreno merciなどが挙げられる。〈n+n〉以外の語彙範疇で複合語を形成しているものとしては、「名詞＋動

詞」〈n+v〉からなるbloodsuckerに対するsanguisuga、「動詞＋名詞」(v+n〉からなるcigarette lighterに対するaccendi-sigaro、「動詞＋不変化詞」(v+par)からなるcallboyに対するbuttafuoriなどがある。これら、英語名詞複合語がイタリア語でも複合語として表現されているものは、意味的にも「交通・スポーツ・動植物」に関するものなどに限定されており、(23a)、(23b)のように、ゲルマン系言語をモデルとして翻訳借用されている語が多く見られる。

4. 結論

3.で考察した英語名詞複合語とそれに対応するイタリア語表現の調査・分析を行ったものをまとめると、(26)のようになる。

(26)

En.	It.	
E_1+E_2	n	n
		x+suf
	n_2+p+n_1	p: di/da/a/per/in/con/contro/su/come
	n_2+a_1/a_1+n_2	
	複合語	v+n
		n+n
		v+n
		v+par
	その他	

英語名詞複合語とそれに対応するイタリア語表現を英語・イタリア語辞典を資料として考察してきた結果、イタリア語の語形成に関して、次のことが指摘できると思われる。まず、第一に、英語では、名詞要素の複合語が生産的であることから、既知の名詞から新語が容易に造り出されるということに対して、イタリア語では、複合語が非生産的である代わりに、特に接尾辞が発達しており、新語生成において派生語形成が大きな役割を果たしているということである。第二に、イタリア語においては、〈n+n〉複合語で語彙化するのではなく、統語パターンと一致している〈n+p+n〉や〈n+a/a+n〉で語彙化するということである。第三番目には、英語名詞複合語に対応するイタリア語複合語は出現率が低く、意味的にも限定された分野でのみ使用されているということである。

最後に、本稿で扱った英語名詞複合語のデータは、かなり語彙化されたものに限定されており、それに対するイタリア語の表現も同様のことが言える。しかしながら、イタリア語の新聞や雑誌などにおけるジャーナリズムで使用される言語には、特に英語の影響から、その場限りで用いられる〈n+n〉構造の語彙や英語をその綴りのまま使用した語彙が多く見られるようになっている。今後は、このような語彙化されていない複合語を含めての分析を課題としていきたい。

註

* 本稿は、1996年9月7日、広島文化女子短期大学で開催された第26回西日本言語学会において「英語名詞複合語とイタリア語表現」と題して口頭発表を行ったものに加筆・修正を施したものである。

** 本稿は、平成8年度文部省科学研究費補助金（奨励研究(A)）「イタリア語における複合語生成の確立過程について」（課題番号08710372）の交付を受けて行った研究成果の一部である。

1) イタリア語における複合語の定義については、拙稿(1996)参照。

2) "The productive use of juxtapositions is very common in English, whereas in Italian it is more limited, and is felt to be a bold innovation often retaining the harshness of a telegraphic style and not very satisfactorily integrated into Italian syntactic patterns."

3) "Questo procedimento (Sintagma), che in italiano è eccezionale (e comunque non va esteso al di fuori del settore tecnico-scientifico), è invece corrente in tedesco, lingua ricchissima di parole composte"

4) "Ad ogni modo mettendo a confronto le lingue romanze con quelle germaniche che hanno maggiori capacità di composizione, dal punto di vista tipologico si può constatare il progressivo avvicinarsi delle lingue romanze alle lingue germaniche"

5) *Cassell's Italian Dictionary: Italian-English English-Italian.* 1967. Macmillan Publishing Company.

6) *I Dizionari Sansoni: Inglese-Italiano Italiano-Inglese.* 1988. Sansoni Editore.

7) 『現代英語学辞典』. 1973. 成美堂. p.188。

8) VconとVderの組み合わせには、資料数は僅かであるが、roll-call(Vcon+Vcon)、cough-mixture(Vcon+Vder)、creature comforts(Vder+Vcon)、flight-commander(Vder+Vder)などもあり、これらも本稿では名詞複合語として扱うことにする。

9) input(Par+V)、take-off(V+Par)、darkroom(A+N)など。

10) choo-chooなどの重複複合語も除外する。

11) 便宜上、イタリア語表現に現れる語彙範疇を小文字で示すことにし、英語の語彙範疇と区別することにする。従って、<n>はイタリア語名詞、<p>はイタリア語前置詞、<a>はイタリア語形容詞を指す。

12) 説明文として表現されている、chopstick→bacchetta per mangiare alla cineseなどをここに含める。

13) (10)はそれぞれ、名詞に付加して名詞を形成する接尾辞(N→N)、動詞に付加して名詞を形成する接尾辞(V→N)、形容詞に付加して名詞を形成する接尾辞(A→N)、名詞

に付加して形容詞を形成する接尾辞(N→A)を意味する。また、Al.Dim.は、Alterati Diminutivi「縮小変意辞」、Al.Acc.はAlterati Accrescitivi「増大変意辞」を指す。

14) 一部、Serianni(1989)の分類を参考にしている。

15) Φは、ゼロ接尾辞(suffisso zero)を指す。

16) Se.は、複合語の第二要素として出現するものを意味する。ここに分類されたものは、独立して出現しないということから、本稿では、複合語の要素ではなく接尾辞として扱った。

17) 〈n+p+n〉の他に、機能語を介する表現として、petrolio da ardere(fuel oil)などの〈n+p+v〉構造も若干見られた。

18) 本文で示した要因の他に、複合語の生成に伴う前置詞の省略による要素間の意味関係の不明瞭さを避けるということも前置詞を介する表現が多い理由の一つとして考えられる。

19) 主要部と性・数の屈折の関係については、拙稿(1996)参照。

20) pomodoro(pomo d'oro)などはこのことを示す顕著な例の一つである。

21) 形容詞と名詞の語順は、イタリア語の統語パターンに準じている。従って、日常頻繁に用いられる形容詞は、名詞を前位修飾する。

22) イタリア語複合語の出現率は、〈v+n〉(56.9%)、〈n+n〉(40.9%)、〈n+v〉(1.1%)、〈n+par〉(1.1%)となり、〈v+n〉複合語が最も多い。

参考文献

Dardano, M. & P. Trifone. 1985. *La Lingua Italiana.* Zanichelli.

Lepschy, A.L. & G. Lepschy. 1988. *The Italian Language Today.* New Amsterdam.

Rohlfs, G. 1969. *Grammatica Storica della Lingua Italiana e dei suoi Dialetti: Sintassi e Formazione delle Parole.* Piccola Biblioteca Einaudi.

Scalise, S. 1988. *The Notion of 'Head' in Morphology.* in Booij, G. & J. Marle (eds.) *Yearbook of Morphology.* Foris. pp.229-245.

Serianni, L. 1989. *Grammatica Italiana: Italiano Comune e Lingue Letteraria.* UTET.

Sugeta, S. 1989. Il Sintagma Nominale del Tipo《parole-chiave》in Italiano e nelle Lingue Romanze. Sociea di Linguistica Italiana 27. pp.195-212.

上野貴史.1995.『イタリア語における合成語の構造：ハイフン語とその主要部』.言語文化学会論集 第5号. pp.21-43.

————.1996.『イタリア語における《N+N》複合語の生成：Headと語形成レベル』.言語文化学会論集 第7号. pp.21-42.